

小学校6年生のサッカー授業におけるサポートの学習指導に関する検討

A study on teaching support play in soccer game on the sixth grade of elementary school

1K06B210

指導教員 主査 吉永武史先生

三富 康治

副査 広瀬統一先生

サッカーやバスケットボールなどのボールゲームでは、パスやドリブル、シュートといった個人のボール操作の技術以外にも、ボールを持たない動きが重要とされている。このようなボールを持たない動きのなかでも、特に攻撃に関わる重要な動きとして考えられているのが「サポート」である。サポートはゴール型ゲームのゲームパフォーマンスにおいては必要不可欠な要素とされている。もし子どもたちがボールを持たない動きを習得することができれば、より多くの子どもたちがサッカーを楽しむことができるようになるのではないかと考えられる。そのためには、サポートの動きを高めるための学習指導を設定する必要がある。

そこで本研究では小学校6年生のサッカーの授業を対象に、サポート学習とサッカーにおける基礎的な技能を保障することを中心としたサッカーの学習指導を行い、それによって児童のゲーム中のサポート能力やゲームにおける基礎的な技能が高まるかどうかについて分析を行った。研究の手続きとしては、授業最初に診断的授業評価を用いて被験者となる児童の実態把握を行った上で、7時間授業で構成したサッカーの単元を展開し、形成的授業評価ならびにゲームパフォーマンス評価を用いて児童の学習成果を確認した。そして単元終了後には総括的授業評価を用いて児童の体育授業に対する態度形成を確認した。その結果、以下の諸点が明らかになった。

単元前後に診断的・総括的授業評価を実施し

た結果、情意目標、認識目標、社会的行動目標の3観点においては高い評価となった。しかし運動目標とくに「運動の有能感」や「できる自信」については評価が低かったことから、サッカーにける戦術課題を解決していく上で最低限必要となる技能を身につけていないままに授業が実施されてしまうと、サポートの重要性や動きを理解できたとしても、運動目標という観点からみれば、児童の運動に対する有能感や自信を高めることは不可能である。

毎時間形成的授業評価を実施した結果、単元進行にしたがって右肩上がりに評価が高くなっている次元もあれば、そうではない次元も見られる。「成果」次元については、わずかではあるが右肩上がりに評価が高くなってはいるものの、5時間目には評価が下がってしまっている。この要因は5時間目からタスクゲームによるグリッドパスゲームが4時間目までと比べて難しくなっているためサッカーに基本的な技能を身につけていない児童にとっては成果が出なかったのではないかと考えられる。

ゲームにおける児童のサポートの動きを分析した結果、5時間目から6時間目のサポート率の伸びが顕著であった。これは4時間目まで設定していたサポート能力を高めるためのタスクゲームによるグリッドパスゲームから、5時間目からグリッドパスゲームへとタスクゲームが変わったことによって、サポートにおけるポジショニングのイメージがより掴めるようになり、実際のゲームの中に発揮できるようにな

ったと推察さる。

ゲームにおける基礎的な技能の変容を分析した結果、パス、トラップの成功率は単元進行に伴い増加傾向が認められたがシュート成功率については単元進行と同時に低下している。本研究では3対3のゲームであることから、ゴールを小さく設定した。そのためゲーム中に攻撃に参加しない児童がゴール前に入ってしまうと点を取ることは児童の技能的にも困難であることから、このような結果になったのだと考えられる。